

2023年6月の選評に代えて 高橋修宏

流木を (桜望子 山形県)  
のみで削って足元に  
たまる木屑の僅かな潮風

「流木」をめぐる時間の経過が、あたかも長廻しのフィルムのように切り取られた作品。「流木」から「木屑」、そして「潮風」へ。けっして大きな飛躍ではないけれども、「木屑」から立ち上がる微細な「潮風」が、たしかな実在感を届けてくれる。

絵の中でしか重ねられない静物 (合川秋穂 東京都)

たとえば、ポール・セザンヌの静物画。それを仔細に見ると、実際には重ならないはずの果実や花瓶などが、一杖のタブローに収まっていることに気づかされる。一見、日常の世界を描いたような静物画にひそむ不思議さを捉えた一句か。

雨の日は耳をすませる (まちりこ 埼玉県)  
公園の遊具から血の香りがしてる

児童公園などの「遊具」が、しばしば事故の原因となったり、ときには子どもの生命を奪ったりすることがある。おそらく「血の香り」には、そんなイメージが投影されているはず。「耳をすませる」という聴覚と「血の香り」という嗅覚のズレも、ある不安定な心性を暗示しているようだ。

まばたきの度に栄えて消える国 (松下 誠一 東京都)

「まばたき」は、一秒にも満たない極めて短い瞬間の身振り。そのたびに「栄えて消える国」とは、一体どんな存在なのか。この一句の「まばたき」の主体は、人間存在を超えた〈カミ〉のようなものかもしれない。

和室にて他人行儀に寝る祖母の  
静かな固さはロウソクに似る (うずたろう 埼玉県)

作者の「祖母」に対する、決して優しいだけではない怜悯な眼差しに立ち止まった。「ロウソク」と形容されることで、やがて「祖母」が溶けて、消えてゆく切なさも感じさせる。

猫が鳴く蛍の光追いかけて (ビスコ 愛知県)

わが家の「猫」も、ときたま中庭に迷いこんできた「蛍」に興奮することがある。何度、飛びついても獲えることはできない。一体、「猫」にとって「蛍の光」とは、何なのだろう？

天文学は天の文学水絞る (中矢 温 愛媛県)

「天文学」という単語を分解し、微分化した作品。「天の文学」という言葉の発見は鮮やかだ。「水絞る」の措辞も、ある身体的な実感を伴っている。

私有地を抱きしめている  
絶え間なく降る雪と火に  
叱られながら (からすまゑ 神奈川県)

人間が土地を「私有」することへのアイロニーを秘めた作品。「雪と火」は、さまざまな天災や戦争などの災厄のメタファーでもあろうか。「抱きしめている」の措辞が、卑小な人間のいじらしさ、そして痛ましさまで届いている。

見られたら光ってしまう (山本先生 東京都)

## しゃぼん玉

もとより「しゃぼん玉」という存在自体が、光っているわけではない。「見られ」ることにより、「光ってしまう」と作者は記す。見る者と、見られる事物との関係を、さらっと書き切った一句。

## 水筒の氷鳴る坂若葉風

(吉沢 美香 宮城県)

どこか懐しく、たしかな実感を喚び起こすような一句。「若葉風」との取り合わせも、気持ちよい。かすかな「氷」の音も聞えてくるようだ。

聴き取ってくれるな、  
ひとのこころは斑。

(こはくいろ 大阪府)

シェイクスピアの喜劇『お気に召すまま』の中で、厭世家の貴族ヴェイクスに「私に斑の服を着させてください。心のうちを語る自由を与えてください。」という台詞がある。白黒はっきりしない「斑」とは、ときに自由であることの証。けっして、恥じることではない。

## 満月が落下してくるその前に

(涼木 和貴 北海道)

じゃがいもの芽を  
取りきらなくては

地球最後の日に〈何をするか?〉と問われても、たいした答えが出せるものでもない。おそらく作者のように、目の前にある「じゃがいもの芽を取りき」ることしかできないのかもしれない。一読して、ラース・フォン・トリアー監督の映画『ノスタルジア』を連想した。

## 家マートシーソーベビーカーの夏

(貴田 雄介 熊本県)

五つの音引きが目を引く特異な一句。どこか明るげな郊外風景を喚起させながら、近未来的な感觸さえ届けてくれる。ここに歩いている人々は、すでに、みな同じ顔をしているのかもしれない。

追いかけるうちに  
追いついてしまった  
青

(うたた 岡山県)

ここでは、「青」とだけしか記されていない。しかし、それは言葉を与えてしまった瞬間に、逃れてしまうようなあえかな、かけがえのない何かであるのかもしれない。

山笑うなよ  
花粉が飛ぶだろ

(羊夏生 東京都)

おかしみのある痛烈な一句。「山笑う」という伝統的な季語が、口語的に反転させられることで、哄笑をさそう一句となっている。やはり花粉症の身には、山が笑ったらたまらないのだ。